

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02406

研究課題名(和文) 奥浄瑠璃の享受と諸本形成の研究 出羽三山・奥羽地域の芸能環境と書物文化の解明

研究課題名(英文) A Study of Okujoruri and its Texts: Elucidation of Performing Arts and Book Culture in the Three Dewa Mountains and the Ou Region

研究代表者

宮腰 直人 (Miyakoshi, Naoto)

同志社女子大学・表象文化学部・准教授

研究者番号：50759157

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では語り物文芸、奥浄瑠璃研究に新たな研究視座と研究手法の提示を行った。具体的には、『湯殿山の本地』『天狗の内裏』『庚申の本地』各諸本の調査と分析を行い、それぞれのテキスト、諸本展開について新たな事実を明らかにし、見解を示した。また、奥羽地域の芸能環境と書物文化との関わりを考察し、研究成果の一端を論文で公開し、研究集会や図書館の講座で新事実や研究の報告をすることで社会還元につとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来の研究の成果をふまえつつ、出羽三山信仰圏である近世庄内地域および米沢・置賜地域を対象に資料を調査し、その文化環境をふまえた新たな奥浄瑠璃研究の方向性を提起した点に学術的意義がある。本研究は文芸としての『湯殿山の本地』『天狗の内裏』『庚申の本地』に注目して研究を進めたが、これらは宗教テキストの側面を有する。近年、地域の宗教テキストについては思想史研究はもとより、歴史学や人文地理学的な見地からも関心が寄せられており、地域資料の学際的研究に文学研究から寄与できる可能性を示した点に特色がある。また、研究成果の一端を地域の公開講座や研究集会で発信し、社会還元した点にも意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, I presented new research perspectives and methods for the study of narrative literature and Okujoruri. Specifically, I surveyed and analyzed the texts of "The Honji of Mt. Yudono", "Tengu no Dairi", and "The Honji of Koshin", and presented new views on each text. In addition, the relationship between the performing arts environment and book culture in the Ou area was considered, and part of the research results were presented in papers and presentations.

研究分野：日本文学

キーワード：奥浄瑠璃 語り物 書物文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

奥浄瑠璃とは、東北地域で浄瑠璃太夫や盲僧・座頭・警女によって伝承された芸能の担い手とその曲目および写本群をいう。小倉博氏による先駆的資料集(『御国浄瑠璃集』1939年)と以降の2冊の資料集(阪口弘之編『奥浄瑠璃集』1994年、福田晃他編『奥浄瑠璃集成』(一)2000年)等を基盤に奥浄瑠璃研究は進展し、主にお伽草子や説経、古浄瑠璃及び金平浄瑠璃等の語り物文芸の地域的展開の一つとして論じられてきた。また、その芸能としての実態については、浅野健二がいち早く東北地域の芸能としての奥浄瑠璃の実態を藩政記録や地誌を活用して解明を試みた。また、須田学氏や阿部幹男氏、居駒永幸氏等が伝承文芸や民俗学の立場から成果をあげ、各作品論を深化した。資料に関しては、近時でも断続的ながら、新資料の報告が続くが、奥浄瑠璃を主対象にした総合的研究は少なく(成田守『奥浄瑠璃の研究』1985年)資料の質量に比して、未だ多くの課題が残されているのが現状である。

そうした状況で中世文学研究の立場から尾崎修一氏や箕浦尚美氏が『天狗の内裏』諸本の一つとして奥浄瑠璃に注目し、研究を推進した。尾崎、箕浦両氏の論考は、それぞれ本研究代表者にとって多くの示唆に富むものであったが、両論とも奥浄瑠璃研究との接点はあまり意識されていないのが惜しまれた。他方、奥浄瑠璃研究でも『天狗の内裏』は俎上に載せられず、研究視座のさらなる刷新が望まれる状況にあった。

また、庄内地域の民俗研究者、五十嵐文蔵氏は『庚申の本地』が、古浄瑠璃・奥浄瑠璃と連続性をもつことに着目し、研究を重ねていたが(同氏『庚申信仰の伝播と縁起』)、それは残念ながら奥浄瑠璃研究としては新展開、再検討の機会を得ぬままの状態であった。

本研究代表者は、かかる現状認識のもと、2015年から2年間、研究スタート支援の助成を受け、「奥浄瑠璃の表現形成と展開に関する基礎的研究 東北地方における中世文芸の享受と創造」(15H06058)を推進し、これまで伊達藩や南部藩を中心に資料収集および研究が重ねられてきた奥浄瑠璃が南東北地域、山形県領域に及ぶことを明らかにした。その成果の一端は、「牛若の地獄極楽遍歴譚試論：『天狗の内裏』の版本系諸本と奥浄瑠璃諸本をめぐって」(『立教大学日本文学』116号、2016年)や、宮腰編『文学史の時空』「南奥羽地域における古浄瑠璃享受 文学史と語り物文芸研究の接点を求めて」として公刊した。前者では奥浄瑠璃『天狗の内裏』を作品論的な諸本のなかにとどめず、同じく奥浄瑠璃『常盤御前鞍馬破り』を視野におさめて理解することを提唱した。後者の論文では、古浄瑠璃と奥浄瑠璃の表現分析から各テキストで羽黒山に関連する言説が展開したことを指摘し、また、『上山三家見聞日記』の記事から、古浄瑠璃の太夫が仙台を経由して当該地域の祭礼に参加していたことを論じた。

これらの研究成果から、代表者は、奥浄瑠璃研究における山形県領域の重要性を再確認し、諸本の展開と、その芸能環境をあわせて総合的に追究する視座を着想するに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究では、東北地域の語り物文芸・奥浄瑠璃享受の実態を解明し、芸能環境と関連づけて諸本展開の分析を行うことで、旧来の作品論を越えた奥浄瑠璃研究総体に及ぶ研究視座の獲得と新たな研究手法の提示を目的とした。具体的には、出羽三山(湯殿山・月山・羽黒山)信仰に関わる『湯殿山の本地』『天狗の内裏』『庚申の本地』を中心に、出羽三山・奥羽地域の芸能環境と書物文化の解明から、東北地域で幅広く受容された奥浄瑠璃の文化的意義を明らかにし、成果を発信することとした。

3. 研究の方法

出羽三山の地域信仰への関与が見込まれる『湯殿山の本地』や『天狗の内裏』『庚申の本地』といった奥浄瑠璃諸本の書誌調査を進め、書物文化解明のための基礎研究をおこなった。また、庄内藩と新庄藩、米沢藩を中心にして、奥羽諸藩の藩士や商家の日記、最上川流域の寺社の日記記録類や祭礼資料を収集した。また、各地域で刊行された郷土芸能に関する諸論考もあわせて収集した。これら収集した資料に基づき、奥羽地域の芸能環境を明らかにしようとしてとめた。

資料の調査収集は、山形県立図書館、市立米沢図書館、新庄市立図書館、酒田市立図書館光丘文庫、鶴岡市郷土資料館等において書誌調査をし、資料所蔵機関から許可を得てデジタルカメラで撮影を進め、研究資料の充実をはかった。書誌調査および資料収集と並行して論文執筆をおこなった。

4. 研究成果

(1)『湯殿山の本地』『天狗の内裏』『庚申の本地』の諸本研究の進展

『湯殿山の本地』の諸本のうち、明和二年(1772)の奥書をもつ酒田市図書館光丘文庫蔵『湯殿山御伝記』の調査研究をおこなった。当該テキストはこれまでほとんど検討されていない伝本

だが、その表現の分析を通して『湯殿山の本地』諸本の展開を理解する上で指標となる表現を見いだしたことは大きな成果である。また、『湯殿山御本地』(明治二十六年、写本二冊、個人蔵)は、西国三十三御詠歌を含む伝本だが、この特色はかつて金沢規雄氏が紹介した『湯殿山本地聞書』にも見え、巡礼や参詣へと導く、宗教テキストとしての側面が特筆される。『湯殿山の本地』諸本の展開の一端を示す伝本として注目される。

『天狗の内裏』については、関連する『常盤御前鞍馬破り』の調査を進め、その成果は、論文「『義経地獄破り』の生成基盤 稚児学匠としての牛若像の展開から」(「立教大学日本文学」120号、2018年7月)に反映させ、公刊することができた。

『庚申の本地』については、飽海郡で享受されていた『庚申御本地』(明治二十一年、写本一冊、個人蔵)や、『庚申縁記』(写本、上下二冊、個人蔵)などを調査し、当該地域の庚申信仰研究、五十嵐文蔵氏『庚申信仰の伝播と縁起』の説を再検討した。古浄瑠璃正本の『庚申の御本地』と関連するテキスト群への注目とともに、『庚申御本地』に「伽の者」が繰り返し言及されることの意義にあらためて注目した。

(2) 庄内地域の芸能環境の解明

本研究では奥浄瑠璃における諸本展開の考察とあわせて当該地域の芸能環境の解明を目指した。この点については、以下の2点の成果を報告できる。1点目は、これまで学会未紹介の資料の発見に基づいて、庄内地域の芸能の一端が明らかになった点である。たとえば『最上出羽少将庄内退治』(享保2年、写本一冊、酒田市立図書館光丘文庫蔵)は、これまで古浄瑠璃や奥浄瑠璃研究ではほとんど取り上げられていない資料だが、本研究の調査によって、本文に「三重」を付し、六段の段分けを有する浄瑠璃本であることが判明した。現時点では本作には諸本がないが、内容からみても当地に根ざした浄瑠璃の創作とみてよいであろう。

佐治ゆかり氏が論じるように、近世庄内地域には大坂や江戸から浄瑠璃太夫が訪れ、興業が行われていた(『近世庄内における芸能興業の研究』)。そうした動向の一方で、江戸や上方からの浄瑠璃正本が伝播、享受するだけでなく、新作を求める機運があったことは当該地域の芸能環境の成熟をうかがわせる。

2点目は、田川郡や西田川郡での説経・浄瑠璃・祭文等の語り物の享受を察せすることができる資料として、『小栗判官』(安政四年 六段 写本一冊、個人蔵)、『お七松坂説教くづし』(明治二十一年 写本一冊、個人蔵)等を見いだすことができた点である。これらは、いずれも書物に享受地を示すと目される地名が書き込まれている。佐治氏の研究では、文政年間を中心に浄瑠璃や祭文等が近世庄内地域で演じられたとする。本資料群は巨視的な興行研究を補完する意義が認められる。また、先述の五十嵐氏が『庚申の御本地』において指摘した「伽の者」への言及との関連や、東田川郡の文人・上林職応(天明年間まで生存か)の著作に説経や物語草子の表現が散見することとの関連が見定められる。とくに本研究でも重視した『庚申の御本地』は庚申信仰資料としてのみならず、上記の地域の諸書と関わらせることで地域の芸能文化を示す資料としても理解できる視座をもつことができたことは成果の一つといっていよう。近世庄内地域の鶴岡と酒田の芸能環境をふまえ、さらに各地域の語り物文芸の享受と書物文化の解明が次の課題としてみえてきたことになる。

(3) 米沢・置賜地域の芸能環境の解明

本研究では、市立米沢図書館所蔵資料の調査研究を中心に進めてきた。その成果として湯殿山信仰の様相や、当該地域の座頭による文芸享受が明らかになった点があげられる。前者については、『湯殿山大権現の濫觴』(明治二十四年頃。写本一冊、米沢市立図書館蔵)等の検討によって、通俗的道歌を交えて「参詣の輩」への心得を説く信仰のあり方が明らかになった。こうした道歌の重要性はすでに『天狗の内裏』研究で箕浦尚美氏が指摘するが、奥浄瑠璃の宗教テキストとしての側面を検討するうえで一つの糸口になるだろう。後者については、米沢藩士・吉田綱富『童子百ものがたり』や『小嶋俊親日記』『こしかた物語』などの資料からは、この地に「地じょうるり」「地ぶし」なる語り物があったことが判明した。この語り物を奥浄瑠璃と見なすことができるかどうかは、さらなる検討を要するが、当該地域の語り物研究を進めた点で大きな成果であったと考えている。なお、これらについては、2017年度の市立米沢図書館主催の古典文学講座にて報告をし、地域の方々へ研究成果の社会還元をはかった。市立米沢図書館の調査からは、平曲や幸若舞曲関連資料を見だし、新たな研究成果を発信した。2017年度立教大学日本文学研究所にて開催された「薩摩藩の文芸とその環境 地域資料からの展望」研究会にて、「米沢藩士と語り物文芸 平曲と幸若舞曲を中心にして」と題する研究報告を行い、米沢の地域資料からみえてきた語り物文芸研究の新たな可能性について提言をした。同会にて地域資料に関心を有する研究者間と意見および情報交換をしたことによって本研究を推進するうえでも有益な研究会になったことを付言しておく。

上記(2)と(3)の成果から、本研究で目的とした奥浄瑠璃研究総体に及ぶ新たな研究視座の獲得と研究手法の提示については、いくつかの課題とともに、一定の成果をあげることができたと考えている。本テーマについては今後も持続的に取り組み、成果を公表することを目指したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮腰直人	4. 巻 120
2. 論文標題 『義経地獄破り』の生成基盤：稚児学匠としての牛若像の展開から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立教大学日本文学	6. 最初と最後の頁 14 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi/10.14992/00018477	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮腰直人	4. 巻 1
2. 論文標題 日本海海域の文芸 幸若舞曲『笈捜し』小考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東アジア文化講座	6. 最初と最後の頁 139-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮腰直人
2. 発表標題 『童子百物語』の世界 米沢・置賜地域の語り物文化
3. 学会等名 市立米沢図書館 古典文学講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮腰直人
2. 発表標題 米沢藩士と語り物文芸 平曲と幸若舞曲を中心にして
3. 学会等名 立教大学日本学研究所研究例会「薩摩藩の文芸とその環境 地域資料からの展望」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮腰直人
2. 発表標題 『義経地獄破り』の生成と富士浅間信仰 地獄極楽譚の新生
3. 学会等名 研究集会「日本文学の展望を拓く」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----